「立正大学社会学論叢」第 23 号、2024 年 3 月発行
【社会学会特別講演会（2023 年 6 月 23 日）講演原稿】

新しいキーの社会学：社会学の基本概念への挑戦としての美学

インスブルック大学 ヘルムート・シュタウプマン
（訳・油井清光、鈴木健之）

はじめに

私の本のタイトル『Sociology in a New Key』は、1942 年に出版されたスザンヌ・ランガーの古典的著作『Philosophy in a New Key』に由来しています。その中で彼女は、象徴主義全般と芸術を徹底的に説明することによって、近代哲学思想の本質的な方向転換を主張しました。このようにして、哲学の伝統の基本的な考え方や前提を、新しい理解や視点に置き換えることができます。社会学者として、また芸術や音楽に深くコミットする者として、私は早くから、美的な問題を一般的な社会学の概念やその方法論の中に受け入れることは容易ではなく、美的体験との整合性が必要であると感じていました。私自身の思考の発展に多大な影響を与えたゲオルク・ジンメルは、友人のハインリッヒ・リッケルトに宛てた手紙の中で、「芸術の本質に関する考察の回り道を経て」(Simmel [1958=1904]101)、彼の一般理論的洞察のいくつかを得たと記しています。そして、ゲオルク・ジンメルの研究において、ジンメル自身が認めている以上に多くのものを負っている人物が、マルティン・ハイデガーでした。「科学の本当の『運動』は、基本的な概念の修正、つまり多かれ少なかれ急進的な修正において起こる。科学の発展レベルは、その基本概念の危機にどの程度対応できるかによって決定される」(Heidegger [2010=1926]9) とハイデガーは述べているのです。美学、社会生活全般における感覚や身体の役割を扱おうとする試みは、そのような改訂の出発点として機能するかもしれません。社会学を新しいキーに置き換え、その基本概念の見直しを提案することは、大胆な主張です。私は、この本と本日のプレゼンテーションによって、私の解決策というよりは、私の仕事の動機となった美学が提起する理論的問題を理解してもらえばと思います。

エルンスト・カッシーラーは、スザンヌ・ランガーにとって重要な資料となった『象徴形式の哲学』を書いた人で、あまり知られていませんが、直訳すれば『実質的概念と機能的概念』（邦題『実体概念と関数概念』）(1923=1910) という本を書いています。この本は、初期ギリシャ時代から近代科学までの科学の発展に関する包括的な研究です。カッシーラーによれば、古代の思考は、私たちの日常的な思考が今もそうであるように、主として実質的概念に縛られていました。例えば、数字は何かの量を表すものとして考えられていました。これに対して成熟した科学は、機能的、形式的、あるいは関係的な概念を用いますが、これらはカッシーラーが同義に用いた表現です。以下の議論では、ゲオルク・ジンメルが提案した用語と互換性があるため、形式的という言葉を使うことにします。

私の最初の主張は、社会学はまだカッシーラーのいう意味での近代科学の状態に完全に到達していない、というものです。私たちは未だに実質的な概念を使用しています。

これは、社会現象がエミール・デュルケームの伝統のように規範のような実体

(substances)と、あるいはマックス・ヴェーバーや現象学的社会学の伝統のように意味と識別される場合です。社会的事実が規範と同一視されると、感覚や感情や身体は、アーリー・ホックシールド（1979）のいう「感覚のルール」のもとに服従させられる事柄となります。同様に、文化社会学で支配的な思想の流れである現象学の伝統では、感覚は「意味づけのコード」への影響によって社会的に有効であると、カレン・セルロ(2018)が最近「嗅覚、意味づけ、意味帰属」に関する論文で書いています。

さて、私が言いたいのは、行為、相互行為、コミュニケーション、社会化などの社会学的概念の実質的な定義が、いわば他のすべての実体や事柄を社会的世界からその環境へと追放してしまうということなのです。一つの実例をお示ししましょう。

アルフレッド・シュッツ (1964) は「音楽の共同性：社会関係の研究」と題された論文を書きました。そこでシュッツは、音楽家が互いに関係し調整するための身体的過程や相互の感覚的知覚の大きな意義を「発見」していますが、シュッツの視点からすると、これらの過程や知覚は、そのような音楽的コミュニケーションの一部ではありません。シュッツにとって基本的な問題は、「コミュニケーション過程がほんとうにすべての可能な社会的関係の基礎なのか。それとも逆に、すべてのコミュニケーションは、すべての可能なコミュニケーションの不可欠な条件であるにもかかわらず、コミュニケーション過程に入らず、コミュニケーションによって把握されることもない、ある種の社会的相互行為の存在を前提にしているのか」(Schutz [1964]161) という問いにあります。このように、シュッツは感覚をコミュニケーション過程の真の構成要素として認めることなく、感覚の重要な地位を認めています。その結果として、人間の心における知覚とその処理は心理学的な現象、あるいは単なる生物学的な現象とみなされ、認知的な「意味のある」コミュニケーションが社会現象とみなされることになります。これは、率直に言って、悲惨な還元主義の一例です。「一緒に音楽を作る」ことを社会学的に包括的に理解するためには、現象学的な前提を逆転させる必要があります。音楽を演奏したり歌ったりすること、つまり感覚的・美的な協調や相互行為こそが真のコミュニケーションであり、楽譜に書かれた 「意味」や、音楽的な調整のためのその他の前提条件は、明らかに二次的なものなのです。

この例は、社会学的概念の本質主義的な定義が、その定義に含まれないすべての内容や実体、事柄に対して盲点となることを示しています。したがって、私の理論的結論は、カッシーラーの意味において、社会学はその基本概念を実体的概念から形式的概念へと移行させる必要があるということなのです。

相互効果としての相互行為：ゲオルク・ジンメル

私が本質主義と呼ぶものを超えようとする試みに対して、社会学の歴史上、多くの味方がいるわけではありません。それでも何人かはいて、最も強力な味方の一人がゲオルク・ジンメルであることはまちがいありません。ジンメルは、形式と内容を区別することで、理論的には、金銭や道徳と同じ程度に、感覚や感情、芸術や遊びを扱うことができたのでした。「社会問題は倫理的な問題であると同時に、鼻の問題、美的な問題でもある」(Simmel [1997]118, [2020]101) とジンメルは書いています。ゲオルク・ジンメルは、こうした議論を何度か少し修正したかたちで著作に含めているのです。

この言明には 2 つの源泉があります。ひとつは、ジンメルの社会概念です。初期の社会学は、階級や組織のような社会構造を扱っていたとジンメルは主張しました。しかし、これらのマクロ的な構造は、ミクロの相互行為の過程を固定化したものであり、社会は個人の継続的な相互の影響の及ぼし合いとしてより適切に理解されます。社会は、その核心において、「実体の断片」(Simmel [1999=1917]70) の集合体ではなく、動的な過程であり、ジンメルが表現したように「機能的な何か」なのです。ジンメルの『社会学』の中で、この思想を詩的に表現した一節があります。「人びとが互いに見つめ合い、嫉妬し合うこと、手紙を交換したり、一緒に食事をしたりすること、目に見える利害とは別に、互いに同情したり反感をもちつつ影響を与え合うこと。‥‥‥そして、人びとが互いの利益のために自分を着飾り、装飾すること。人から人へ、瞬間的あるいは永続的に、意識的にあるいは無意識のうちに、結果として儚いあるいは豊かなといった具合に、こうした何千もの関係すべてが私たちを絶え間なく結合させる。それぞれの瞬間、糸は紡がれ、落とされ、また引き取られる。そして、また別の糸が紡ぎ出され、さらに別の糸が織り込まれていく」(Simmel [2010]488)。この引用は、ジンメルが社会の概念に美学を取り入れた第二のさらに深い理由、つまり形式と内容の区別の一般的な認識論的意義を示しています。理論的な帰結を示す例として、ジンメル社会学の最も基本的な概念である「相互行為」を挙げますが、ジンメルはこれを「社会」と同義に用いています。相互行為とは、ドイツ語の Wechselwirkung［相互作用］の訳語であり、文字どおり「相互効果」(mutual effect) を意味します。「相互効果」は、その効果の内容が何であるかを未解決のままにしておきます。このことは、社会的な事柄のア・プリオリな決定を、ア・ポステリオリな、あるいは経験的な問題に変えるのです。あらゆる事柄が考えられ、それは経済的であったり、宗教的であったり、性的であったり、倫理的であったり、美的であったりしますが、これらの内容はどれもそれ自体としては社会的なものではないのです。

情報： 差異をもたらす差異（それがコード化されるメディアに依存しない）

社会科学の伝統において、私の主張と一致すると考えるもう一人の著名人は、グレゴリー・ベイトソンです。「情報とは差異を生み出す差異である」という彼の言葉は、とくにシステム論において、一種のカルト的ともいえる地位を獲得しています。しかし、この言葉は、意味の違いやコードのことを指していると大きく誤解されています。しかし、ベイトソンにとって情報とは、すべての生命システムがその生態系の中で方向性を定めるための冗長性を生み出すために利用できる形式的なカテゴリーであり、抽象的な事柄であったのです。 彼は、「形式、実体、差異」(1972b)と題するエッセイの中で、この概念を詳しく説明しています。その結論は、生物学的、文化的、認知的、感覚的、美的、意識的、無意識的など、あらゆる差異が違いを生むというものです。したがって、意味は、情報を符号化しうる数ある媒体のうちのひとつに過ぎません。だからこそ、ベイトソンは芸術に関する論文(1972a)の中で、「心には心なりの理由があり、それは理性には知りえない」(パスカル)の引用を繰り返しているのです。社会学的な理性は、心の理由に対して敏感であり、オープンである必要があることは、誰もが認めるところでしょう。

社会

ここでも私の基本的な指摘は、社会の全体的な実体的な特徴づけは、一面的または一元的な概念につながるということです。

「現代」社会のほとんどすべての特徴づけの基準点は、マックス・ヴェーバーの近代化論です。彼によれば、本質的な特徴は、生活のあらゆる領域に浸透している支配的なパターンとしての合理性とされます。社会学的想像力は、「産業社会」や「マクドナルド化」(Ritzer [1996]) など、まさにこの考え方に対応する用語を発明することで創造性を発揮してきました。ジークフリート・クラッカウアーは、『マス・オーナメント』(1995=1963) の中で、ティラー家の少女たちのダンスの造形を、組立式労働に類似した現代の相互行為と協力の形態の合理主義的な振り付けと解釈したものの比喩として用いました。

第二次世界大戦後の展開の中で、社会生活を決定づけ、近代の合理的なパターンに取って代わる非合理的なパターンがますます増えてきているという考え方が生まれました。ここでもまた、ポストモダンとそれに付随する美的社会という、さまざまな呼称が見受けられます。

その結果、社会は前近代から近代へと進化し、やがて現代のポストモダンの状態に入るという見解が広く受け入れられています。これらの特徴はすべてそれぞれの段階における支配的なパターンを主張するという意味で「一元論的」だということです。しかし、歴史を公平に見れば、この想定された継承が決して社会的現実ではなかったことを示す多くの実証的証拠があります。19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、確かに工業化が進みましたが、生活の非合理的な部分が重要であることに変わりはありません。逆に、現代社会で工業生産と合理性の重要性が低下したという証拠もまったくありません。

社会の一元論的な概念に代わるものとして、より抽象的、形式的な概念の使用があり、社会分化は社会の進化を理解するための最も重要なツールの一つなのです。ゲオルク・ジンメルが『貨幣の哲学』(1990=1900) で書いたように、合理的・手段的な貨幣という媒体が生活様式に与える影響は、それに付随して逆のパターンが強化されるということでした。分化した貨幣経済は、主観性と個性の重要性を高めるための空間を提供します。個性の高まりとともに、合理的なパターンや、生活のルーティーンの過程における対称性やリズムが崩れていきます。生活様式や個人的なつきあいは、前提条件となる形態から、個人の選択や個々人が交渉する社会形態へと変化していくのです。

私のテーゼに対するいわば最後の証人はまったく別の角度から再び登場します。テオドール・アドルノは、美学と音楽の社会学を扱うフランクフルト学派の最も著名な代表者です。音楽家として訓練を受け、アルノルト・シェーンベルク、アルバン・ベルク、アントン・ウェンバーンを中心とする第二ウィーン派に傾倒したアドルノの社会学は、音楽、芸術、文学を社会的、経済的な力の単なる産物に還元することはありませんでした。文化生産の工業化の影響に対するアドルノの批判は、商業化によって歪められることのない文化の擁護を意味しています。音楽社会学は、音楽をそのようなものとして理解することから始めなければなりません。このことは、マックス・ヴェーバーが音楽社会学の断片で書いた『音楽の社会学的合理的基礎』(1972)（邦訳『音楽社会学』）と対立することになります。アドルノは、ピアノの発展こそが近代的な音楽制作における合理性の支配の表現であり、

したがって近代と合理化の一般的な同一化の証明であるとするヴェーバーのテーゼを批判しています。アドルノの例の一つを聴いてみましょう。

ヨハン・セバスティアン・バッハ『フーガ 嬰ト短調』(『平均律クラヴィーア曲集』第 2 巻)

アドルノは、この曲を半音階であるというだけで注目するのではなく、「浮遊感のある、意図的に曖昧な和声が、8 分の 6 拍子の特徴を持つ最も成熟したショパンを疑う余地もなく呼び起こす。この曲は、無数の色彩のファセットにわけられ、まさに歴史主義が排除しようとする神経質な感性の意味での現代的な音楽」(Adorno [1977]136) ということで注目しています。

合理性の増大が主観性の増大を条件づけるというジンメルの分化論になぞらえれば、調性音階の合理化と楽器製造の進歩が、まさに作曲家を技術的制約から解放し、音楽制作における美的自律性をもたらました。

社会理論に戻ると、この例は、社会の発展について、一つの支配的な特定のコンテンツによって特徴づけられる一連の社会的段階ではなく、合理性や美学といった相互行為やコミュニケーションにおけるコンテンツの共進化 (co-evolution) やコンティンジェンシーという意味で理解することを意味しているのです。

文化と文化的方法論

文化という概念には、伝えたいふたつの基本的な考え方があります。 第一に、その主要な社会学的レリバンスは、私が自律的機能と呼ぶもの、すなわち社会生活にとってのその意味にあり、一方、ブルデューのいう意味での地位目的での使用やさまざまな形態の資本の蓄積といった文化の異質な機能は、その派生物に過ぎません。第二に、文化は内容や実体で定義できないため、やはり形式的な用語で理解される必要があるということです。このことを、方法論の問題と結びつけて説明してみましょう。

社会学の理論的基礎の再評価は、研究方法の妥当性の再考を必要とします。現代社会学で最も認知されている方法論の概念のひとつが、美術品を例にして開発され、説明されたことは、単なる偶然ではないように思われます。ロダンの「考える人」がそれです。考える人は実際に何をしているのだろうかと、イギリスの哲学者ギルバート・ライルは問い、その答えを「厚い記述」と呼ばれる方法論に求めました (Ryle [1971])。後にクリフォード・ギアーツがこの概念を取り上げ、現象学的社会学に適合する概念に変容させました(Geertz [1973a])。

私のテーゼは、これは不必要な狭隘化を意味するものであり、ライルのオリジナルのアイディアを再構築することで、私が進めようとしているより広い社会学の視点を受け入れる方法論の道具を提供する、というものです。

クリフォード・ギアーツの『文化の解釈学』におけるプログラム的な論文、「厚い記述」は、アンドレア・コッス (2021) が最近の論文で述べたように、「解釈学的マニフェスト」となりました。以下はその論文からの重要な引用です。「私が支持する文化の概念は‥‥‥本質的に記号論的なものである。マックス・ヴェーバーと同じように、人間は自分自身が

紡いだ意味の網の中に吊るされている動物であると考え、文化とはその網であり、その分析とは‥‥‥意味を探求する解釈学的なものだと考えている」(Geertz [1973a]5)。この引用文にはギアーツの理論が端的に示されていて、それゆえに、批評や対照的なモデルを策定するための良い出発点となっています。文化概念、その人類学的意味、社会的結合における「意味」の役割、そして正確な方法論としての解釈がそれです。

まず、文化概念から見てみましょう。ここでは、社会概念の場合と同様に、問題のある事物 (matters) のアプリオリな帰属が見られます。引用文中の文化の定義は、ギアーツがクライド・クラックホーンのような文化論者に帰する折衷主義を避けるためのものです。クラックホーンは、ギアーツによれば、「生活様式」、「考え方、感じ方、信じ方」、「標準化された志向性」、「学習行動」など、11 種類の文化的対象を挙げていました。このような混乱したリストを前にして、人は選択をしなければならない、とギアーツは結論づけ、意味を追求していきました。しかし、クラックホーンの言うとおり、彼のリストの中には、文化から除外できるものはなく、リストも決して網羅的なものでもありません。とくに、物質的あるいは「客観的」な文化と曖昧に呼ばれているものには、彫像、機械、武器、ピラミッド、コンピュータなどが含まれていません。選択するというのではなく、人類学者、民族学者、社会学者が文化的対象としているすべての内容を含み、同時に文化と呼ばれる多様な現象をまとめているものを明確に理解できるような、一般的または形式的な定義を見つけるほうが有望でしょう。ここでもう一度、ゲオルク・ジンメルと彼の定義した「文化とは、生命の創造的な運動によって生まれる形態や構造である」という言葉を思い出したいのです。

ギアーツの「意義の網」に対する判断は、現象学の伝統に関連する人類学的な前提の問題をすべて引き継いでいます。「意義の網の中に吊るされた動物」モデルは、『現実の社会的構成』(1966) の中で提唱されたバーガーとルックマンの立場と一致します。『現実の社会的構成』において、人間は意味を処理する能力によって「動物の領域における特異な地位」を獲得するというバーガーとルックマンの見解に沿ったものです。アーノルド・ゲーレン(1988 [1940]) の有名な表現を借りれば、人間から意味を差し引いた結果が動物、より正確には有機的欠陥を持つ動物に等しいということに、私は疑問を禁じえません。身体は、意味が引き落とされた後に残る生物学的な残りものではありません。人間の身体そのものであり、それ自体が人間であり、それ自体が社会的世界の一部なのです。これは私の議論の基本的な公理であり、記号論的・規範的なコントロールを超えた身体と感覚の文化化・社会化を理解するために必要なことであると考えています。

さらに重要なことは、そのような動物が、単に意味の網によって、少なくとも身体や感覚、感情から概念的にも実際にも切り離された意味によって結びつけられているというのは、非現実的だということです。相互の感覚的な知覚、感情的な愛着、共感などの影響によって紡がれる網は、少なくとも「意味づけの構造」と同じくらい重要です。ギアーツが「厚い記述」の冒頭で、自分の解釈の方法論を行動主義的経験論と区別するために用いた「3 人の少年が目を瞬かせた」という有名な例は、この点をよく示しています。準写真的な観察では、痙攣と瞬きの違いを見逃してしまいます。「行動のスペック」に「文化のフレック（斑点）」を加えることで (Geertz [1973a]6)、パロディや陰謀のような意図的な行動を

指すジェスチャーが浮かび上がります。ギアーツは、この文化のフレックを理解することが、違いを生むといいます。しかし、痙攣という行動のスペックは、無意識の思いやりを引き起こすかもしれません。それは嫌悪や愛情をもたらすかもしれず、それによって相互行為、その安定性、持続性、崩壊に影響を与えるかもしれません。ギアーツが言及する文化の斑点の類とは関係ありません。

その結果、「意味のある構造」の網の目の再構築としての厚い記述は、ギルバート・ライルが意図したような、あらゆる種類の意識的・無意識的なレファレンスや制度などをもつより大きな社会における行為の状況的な埋め込みの記述に戻る必要があります。ギアーツ (1973b) がバリの闘鶏を分析する際に、流血沙汰 (status bloodshed) の概念やバリ社会の身分階層に言及したのは、彼自身の解釈学的方法論に従ったのではなく、機能的方法論を用いたのだと、私は素直に考えています。つまり、厚い記述とは、意味というメディアにおける指示性 (referentiality) の問題だけでなく、あらゆる形態の「網」、とくに美学論の観点からすれば感覚的・感情的な紐帯（こうした紐帯により私たちは結びつきます）の問題でもあるのです。

まとめ

> 主よ、あなたはそれを表現するために、言葉で何を望んでいるのですか？言葉は火を描くだけで、表情は火そのものだ‥‥‥(Mark Twain 1889: 347)。

コミュニケーションや相互行為における火そのものを見逃す社会学は、社会生活の最も重要な部分の理解を見逃すことになります。私の議論の基本的な前提は、人間の身体、感覚、心、そして特定の文化化の形態との一体性です。私たちが日常生活で慣れ親しんでいるこの統一性を事後的に区別することには、それなりの理由があるかもしれません。しかし、人間はその存在の全体性において社会的世界に入り込んでいます。このことを理解するためには、現在、社会学で支配的なパラダイムの諸制限を超えていく必要があります。まさにここに、ハイデガーのいう「基本概念の‥‥‥多かれ少なかれ根本的な修正」こそが社会科学の真の運動となるチャンスを私は見るのです。

私の個人的な計画において、『新しいキーの社会学』は初めの一歩でした。次の著作はこのプロジェクトを継続するものです。そのタイトルは『社会学的理性批判』です。この本が完成し出版されたあかつきには、その講演のために私を再びここ立正大学に招待してくださることを心待ちにしています！ご清聴ありがとうございました。

参考文献

Adorno, Theodor W. 1977. Bach gegen seine Liebhaber verteidigt. In *Prismen. Kulturkritik und Gesellschaft*, 134-147. Frankfurt a Main: Suhrkamp.（「バッハをその愛好者たちから守る」渡辺祐邦・三原弟平訳、『プリズメン—文化批判と社会』所収、筑摩書房、1996 年）

Bateson, Gregory. 1972a. Style, Grace, and Information in Primitive Art. In *Steps to an Ecology of Mind. A Revolutionary Approach to Man's Understanding of Himself*, 128-152. New York:

Ballantine Books.

Bateson, Gregory. 1972b. From, Substance, and Difference. In *Steps to an Ecology of Mind. A Revolutionary Approach to Man's Understanding of Himself*, 448-465. New York: Ballantine Books.

Berger, Peter L. and Thomas Luckmann. 1966. *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge.* Garden City, NY: Anchor Books.（『現実の社会的構成—知識社会学的論考』（新版）山口節郎訳、新曜社、2003 年）

Cassirer, Ernst. 1923 [1910]. *Substance and Function (Substanzbegriff und Funktionsbegriff)*. Chicago: The Open Court Publishing Company.（『実体概念と関数概念—認識批判の基本的諸問題の研究』山本義隆訳、みすず書房、1979 年）

Cerulo, Karen. 2018. Scents and Sensibility: Olfaction, Sense-Making, and Meaning Attribution. *American Sociological Review* 83 (2): 361-389.

Cossu, Andrea. 2021. Clifford Geertz, Intellectual Autonomy, and Interpretive Social Science. *American Journal of Cultural Sociology* 9: 347-375.

Geertz, Gilbert. 1973a. Thick Description: Toward an Interpretative Theory of Culture. In *The Interpretation of Cultures. Selected Essays*, 4-30. New York: Basic Books.（「厚い記述—文化の解釈学的理論をめざして」吉田禎吾他訳、『文化の解釈学１』所収、岩波書店、1987 年）

Geertz, Gilbert. 1973b. Deep Play. Notes on the Balinese Cockfight. In *The Interpretation of Cultures. Selected Essays*, 412-453. New York: Basic Books.（「ディープ・プレイ—バリの闘鶏に関する覚え書き」吉田禎吾他訳、『文化の解釈学２』所収、岩波書店、1987 年）

Gehlen, Arnold. 1988 [1940]). *Man: His Nature and Place in the World*. New York: Columbia University Press.（『人間—その本性および世界における位置』平野具男訳、法政大学出版局、1985 年）

Heidegger, Martin. 2010 [1926]. *Being and Time*. Translated by Joan Stambaugh. Albany: State University of New York Press.（『存在と時間』[邦訳多数]）

Hochschield, Arlie. 1979. Emotion Work, Feeling Rules, and Social Structure. *American Journal of Sociology* 85: 551-575.

Kracauer, Siegfried. 1995. [1963]. *The Mass Ornament: Weimar Essays.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Langer, Susanne K. 1942. *Philosophy in a New Key. A Study in the Symbolism, Rite, and Art*. Cambridge, MA: Harvard University Press.（『シンボルの哲学—理性、祭礼、芸術のシンボル試論』塚本明子訳、岩波書店、2020 年）

Ritzer, George. 1996. *The McDonaldization of Society*. Thousand Oaks, CA: Pine Forge Press.（『マクドナルド化する社会』正岡寛司監訳、早稲田大学出版部、1999 年）

Ryle, Gilbert. The Thinking of Thoughts. What is "le Penseur' doing? In *Collected Papers*, vol. 2, 480-496. New York: Barnes & Nobles.

Schütz, Alfred. 1964. Making Music Together. A Study in Social Relationship. In *Collected Papers II. Studies in Social Theory*, 159-178. The Hague: Nijhoff.（「音楽の共同性—社会関係の研究」桜井厚訳、『現象学的社会学の応用』所収、御茶の水書房、1980 年）

Simmel, Georg. 1958 [Nov. 11, 1904]. Brief an Heinrich Rickert (Letter to Heinrich Rickert). In *Buch des Dankes an Georg Simmel. Briefe, Erinnerungen, Bibliographie*, ed. Kurt Gassen and Michael Landmann, 101. Berlin: Duncker & Humblot.（『レンブラント』浅井真男訳、『ジンメル著作集８』、白水社、1977 年）

Simmel, Georg. 1990 [1900]). *The Philosophy of Money*. London: Routledge.（『貨幣の哲学』（新訳新装復刻版）居安正訳、白水社、2016 年）

Simmel, Georg. 1997. Sociology of the Senses. In *Simmel on Culture*, ed. David Frisby and Mike Featherstone, 109-120. London: Sage.（「感覚の社会学」居安正訳、『社会学雑誌』（神戸大学）4: 173-190、1987 年）

Simmel, Georg. 1999 [1917]. *Grundfragen der Soziologie*. In *Georg Simmel Gesamtausgabe*, vol. 16, 59-149. Frankfurt a. Main: Suhrkamp.（『社会学の根本問題』清水幾太郎訳、岩波書店、1979 年）

Simmel, Georg. 2010. The Problem of Sociology. In *Georg Simmel Englischsprachige Veröffentlichungen (English Publications) 1893-1910*, 465-497. Frankfurt a. Main: Suhrkamp.

Simmel, Georg. 2020. Sociological Aesthetics. In *Georg Simmel. Essays on Art and Aesthetics*, ed. Austin Harrington, 95-107. Chicago: University of Chicago Press.（「社会学的美学」北川東子・鈴木直訳、『ジンメルコレクション』所収、筑摩書店、1999 年）

Staubmann, Helmut. *Sociology in a New Key. Essays in Social Theory and Aesthetics*. Cham: Springer Nature.（油井清光・小島奈名子・鈴木健之により邦訳準備中）

Twain, Mark. 1889. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. New York: Harper & Brothers.（『アーサー王宮廷のヤンキー』大久保博訳、角川書店、2009 年）

Weber, Max. 1972. *Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik* (The Rational and Sociological Foundations of Music). Tübingen: UTB.（『音楽社会学』安藤英治・池宮英才・角倉一朗訳、創文社、1967 年）

Helmut Staubmann
（インスブルック大学社会学教授　ヘルムート・シュタウプマン）
（訳・神戸大学名誉教授　油井清光、社会学科教授　鈴木健之）

《付記》

2023 年 6 月 23 日、オーストリア・インスブルック大学より、ヘルムート・シュタウプマン(Helmut Staubmann) 教授をお招きし、立正大学社会学会特別講演会が 341 教室にて開催された。

演題は「新しいキーの社会学 (Sociology in a New Key) ― 社会学の基本概念への挑戦としての美学」。スザンヌ・ランガーの「新しいキーの哲学 (Philosopy in a New Key)」（邦題『シンボルの哲学―理性、祭礼、芸術のシンボル試論』）の社会学版をめざして上梓されたシュタウプマン教授の最新刊、『新しいキーの社会学』の内容をもとにした本講演はじつに刺激的であり、かつ＜社会学的想像力＞をかき立てられるものであった。オーストリアでただひとりのパーソニアン（タルコット・パーソンズ研究者）を自負するシュタウプマン教授は、英語圏ではあまりよく知られていないジンメルの文化論を英訳するなど、ジンメル研究者としても知られている。

この講演原稿はシュタウプマン教授より事前にいただいていたので、講演前に日本語訳を学生のみなさんに配布することができた。しかし、かなり理論的な内容なので、フロアのみなさんの反応が芳しくないのではないかと心配していた。けれども、私の予想に反して（とてもうれしい誤算）、全体討論を通訳してくださった日本を代表するパーソニアン、油井清光教授のおかげで、活発な質疑応答が繰り広げられ、盛会となった。

「まずは、感じろ！」というシュタウプマン教授（そして私）の思いはみなさんにしっかりと届いたことだろう。次なる著作、『社会学的理性批判』も今からとても楽しみである。余談になるが、シュタウプマン教授の実兄がザ・ローリング・ストーンズのミック・ジャガーの友人とのこと。シュタウプマン教授の業績の一つに『ザ・ローリング・ストーンズ―社会学的パースペクティブ』(*The Rolling Stones: Sociological Perspectives*) がある。まさしくこれぞ＜感じる＞社会学！

ご講演いただいたヘルムート・シュタウプマン教授、通訳してくださった油井清光教授、そして当日参加いただいたみなさん、ほんとうにありがとうございました。

(立正大学文学部社会学科教授・鈴木健之)

油井　シュタウプマン　鈴木